問題を、幸に博士に據りて斯く世間一般に紹介せられた點は、吾人深く感謝せねばならぬ。〔魚澄〕

文明と氣候(E. Huntington: Civilization and Climate.—Yale University Press, 1915)

〔文明と氣候〕は、題目として陳腐の嫌があるので何人と雖兩者の間に關係の有ることを否定する者はあるまい。然し其關係の性質及び計數的研究となると、學者にとりての活動の餘地は、バックル以來著しく減しては居らぬ。されば此著者の試みの如きは慥かに新機軸をあらはしたものであつて、其學界に寄與した功績の沒し難いものがある。總計十三章より成る本書の大体は、先づ文明の發達が人種の如何にもよること勿論ではあるが、それと同時に、氣候の影響を受けること莫大であるといふことからして說き起こし、其氣候を論するに當りては、最初に四季の變遷が人の活動に如何に影響するかを論じて、活動の最も鈍ぶる季節は一月二月の交と七月八月の交とで、活動の最も旺盛にあり得るのは、五月六月の交と十月十一月の交とであると結論し、此結論からして更に一歩を進め、溫度からして云へば平均が華氏三十八度以上六十五度以下、簡單に云へは平均五十度位がよろしく、濕度は百分の六十位が適宜であると云ひ、次にはさればとて三百六十五日を通じて斯かる溫度を有するのが理想的氣候の土地とは云へぬ、理想的氣候といふのは活動に適應することを前提としたものでなければならぬ、變化の少い氣候は刺激に乏しく、活動をなすに不便である、眞の理想的氣候には、適當な溫度濕度の必要なると同時に、適當な變化が伴はなければならぬ、而して此變化を起こさすものは cyclonic storm である、此 storm のない所には高等な文明が成り立たぬと云

つて居る。

以上は著者が、工場に於ける職工の仕上げ高、學校に於ける學生の試驗成績、其他保養院内にある患者等に就いて、念入の統計的調査をなし、それを基礎として立論した所のものであつて、第八章以下は其理論の應用といふ譯になる。即ち著者は以上の條件に準據して一方に於ては世界中理想的に近い氣候を有するのは何處であるかを述べ、他方に於ては廣く世界の學者二百餘名の意見を徵して、文明分布圖なるものを製作し、而して此兩者が相合致するから、立論の正鵠を得て居ることが愈明白であるといふ風に論じて居る。これが此著書の本旨の存する所で、氏の說く所によれば、日本の氣候などは、先上の下といふべく、惜しいことには雨期が長過ぎる、從つて日本の文明の評價が、英吉利の十點に對して南日本に於て八點三分、北日本に於て六點二分、となるといふことである。

其外に著者は同じ土地にも古今の氣候に變遷があり、文明の消長も一は之に基因すと說き、文明に關する氣候上の假定說といふ章で終りを告げて居るがこれは著者の新しい議論ではなく、寧ろ元來の持論を更に精確に紹介したものと見てよい。

兎に角此著書は題目のありふれて居るに拘はらず、多數の新研究を含み、人を啓發する所多き好著といふべきものである。〔原〕